

紙ふうせん

KAMIFUSEN No. 77

成田市立図書館だより 第77号

2014年（平成26年） 3月30日発行

編集 成田市立図書館

〒286-0017 千葉県成田市赤坂1-1-3

<http://www.library.city.narita.lg.jp>



0476-27-4646（自動応答）

0476-27-2000（直通）

FAX

0476-27-4641



成田市立図書館 本館一般展示「市制施行60周年 ふるさと成田」の様子（2014年3月-4月）。
成田山や成田空港に関する本など、成田をより深く知るための本が紹介されました。

（紙面紹介）

- ・平成25年度図書館文学講座「物語の力」（講師：作家 沖方 丁氏）…P2
- ・平成25年度図書館市史講座「門前町成田の変遷と祇園祭」
（講師：成田市文化財審議委員会副委員長 小倉 博氏）…P3
- ・成田についてもっと知ろう（その1）…P4

図書館文学講座「物語の力」

講師：作家 沖方 丁氏 2013.11.9 (土)

作家の沖方丁（うぶかた とう）さんをお招きし、「物語の力」と題してお話し頂きました。沖方さんは1996年に『黒い季節』でデビュー。2009年刊行の『天地明察』では、本屋大賞をはじめ数々の賞を受賞されました。講演では「物語の力」とは何かといったお話と絡めて、少年時代を海外で過ごされた自身の生い立ちから、講座の前日に出版されたばかりの最新作のお話まで、幅広く語っていただきました。



「物語の力」を意識した少年時代

幼少期はネパールやシンガポールなどで生活していた沖方さん。クラスメイトは人種、宗教、国が全員バラバラ。誕生日会を開けば宗教によって食べられるメニューが違うし、お互いの生活習慣や宗教観を議論することもしばしば。そんな環境で生活するうちに沖方さんは、人間は宗教のような大きな物語から生活習慣といった小さな物語まで、様々な物語によって自分を成り立たせていることを意識します。

15歳の時に日本に帰国。海外の学校では見られない、一斉に起立、気をつけ、礼の挨拶をする生徒たちに沖方さんは仰天します。自分は日本人であるという意識があるにも関わらず日本人を形成している物語がわからない。「物語の空白を埋めるのも物語の力である」「僕にとっては長らく日本人とは何かというのが物語の空白だった」と沖方さんは言います。

執筆と共に模索した「日本人の物語」

高校生の時、日本独自の暦を作成した江戸時代の天文学者・渋川晴海の存在に感銘を受け、彼を主人公にした物語を書きたいと思うように。その思いは約16年後に結実し、『天地明察』を出版します。

『天地明察』執筆後も歴史書の編纂に執心した水戸光圀を主人公にした『光圀伝』、清少納言と中宮定子の交流を描いた『はなとゆめ』と、歴史小説を次々と発表します。『天地明察』では暦と日本人の関わり、『光圀伝』では日本人の歴史に触れ、最新作の『はなとゆめ』では「日本人にとって天皇とは何か」という謎に挑まれました。日本人の心根を保持し、日本人の宗教観を支える存在であるというのが、その結論でした。そうした経緯を経て、ようやく日本人の物語を理解できたと沖方さんは言います。

最後に、これからは自分自身がどんな物語を生み出せるかが問われている時代であり、才能はその人が自分の物語を自覚した瞬間に生まれるという言葉で講演を締めくくられました。





図書館市史講座 2013. 11. 24(日)

「門前町成田の変遷と祇園祭」

講師 成田市文化財審議委員会副委員長
小倉 博氏

2013年度の図書館市史講座は、成田山靈光館職員の小倉博氏を講師に迎え、お話をいただきました。

小倉氏は成田市田町で生まれ育ち、長く成田山靈光館に勤務されました。門前町として発展した成田の歴史、成田山とゆかりのある市川団十郎について造詣が深く、成田の歴史研究の第一人者として活躍されています。

講演では最初に、古代の成田の地名と「成田」という地名の初出についてお話をいただきました。平安時代に編さんされた『和名類聚抄』には、古代律令制における行政区画である国・郡・郷の名称が網羅されており、旧成田市域には玉作(たまつくり)・山方(やまがた)・酢取(はどり?)・麻在(あそう)・八代(やつしろ)等の名が見えるそうです。中でも玉作は、昭和37年以降発掘調査が行われ、その成果は、文献史料と現在の地名を結びつける画期的な発見であったといえます。

また、「成田」という地名の初出については、寺台永興寺(ようこうじ)の木造聖観音坐像内部に「応永十五戊子年(1408年)二月成田郷安養寺本尊」という墨書銘が記されており、これが現在確認できる最古の金石文であり、大変重要な意味を持つものである、と述べられました。

次に、江戸時代の成田村に門前町が形成される過程について、成田山日記帳・成田山全図・新勝寺開帳年表などの史料をもとに説明していただきました。1701(元禄14)年時の成田村の家数は98軒。旅籠屋は1軒もなく、準農村でありました。新勝寺が1704(元禄16)年に出開帳を成功させたことで成田村は門前町となりました。講演では当初の台町・仲町・本町・田町の4か町から、現在の7か町になる変遷を詳しく紹介していただきました。

最後に、成田市最大の祭りである祇園祭について取り上げられました。古くは享保年間にまで遡る記録が見られ、約300年近い歴史があることや、成田駅東側にある湯殿権現山の祭礼が始まりであることなどをお聞きすることができました。また、台町・仲町・本町・田町の4か町に成田山から山車が支給されたことや、山車についている提灯に込められた意味など、とても興味深いお話を伺うことができました。

当日は133名の方々にご参加いただき、講演終了後には多くの質問が寄せられました。その一つ一つに丁寧にお答えいただき、大変有意義な講演会となりました。

成田についてもっと知ろう (その1)

今年、成田市は誕生して60周年を迎えました。市では「歴史とともに60年さらに未来へ飛躍の成田」を基本テーマに、さまざまな記念行事を行います。そして、図書館は1984年に開館したので、ちょうど半分の時を重ねてきたこととなります。

このような年だからこそ、郷土についてより深く理解するために本館2階の参考資料室を訪れてみてはいかがでしょうか。

「住んでいるまちについて知るための本を集める」のは図書館の大切な働きです。この部屋の一角には成田市や印旛地域、さらに千葉県に関しての本を数多く揃えた書棚があります。成田山や空港関連の資料をはじめ、長い歴史を持つ成田ならではの多種多様な資料を所蔵しています。窓口には司書が常駐して、「こんなことを調べているが、どの本を見たらいいか」といった相談をお受けしています。これまでも、「成田という地名の由来は何か」「昭和初期の門前町の町並みが知りたい」「江戸時代の印旛沼の開発についての資料を見たい」などの質問が幅広く寄せられています。

先日は「三里塚地区の人々の昔の暮らしを調べたい」という相談がありました。このことについては『市民が語る成田の歴史3』に詳しく書かれています。この本は市民の方々に行った聞き取り調査の結果をまとめた3冊の本のうちの1冊です。



お花見の名所として賑わった下総御料牧場や、成田から三里塚を経て多古や八街方面に通じていた軽便鉄道のこと、苦難の末に原野を開墾した戦後の開拓のことなど、昭和の三里塚の暮らしが生き生きと語られています。

相談の中で多いのが「昔の成田の地図が見たい」というものです。明治時代から現在までの2万5千分の1の地図をはじめ、成田ニュータウンや公津の杜地区の造成前と造成後の様子が比較できる航空写真、昭和40年代以降の住宅地図など各種のものを用意してあります。これらの地図を眺めると成田のまちが積み重ねてきた時の長さ、その大きな変化を垣間見ることができるようでしょう。この節目の年、“成田を知る資料の宝庫”図書館への皆さんのお越しをお待ちしています。

編集後記

次号では「成田についてもっと知ろう」の第2回として、私たちのふるさとについて理解を深めることのできる資料を数多くご紹介いたします。ご期待ください。

成田市立図書館だより

No. 77

発行

成田市

編集

成田市立図書館

〒286-0017 千葉県成田市赤坂1-1-3

TEL0476(27)2000

発行日

2014. 3. 30

登録番号

成教図 13-053